

團 地 造 成 事 業

—緊急発掘調査概報—

末広六道原遺跡

1979

伊 那 市 教 育 委 員 会
長 野 県 企 業 局

團 地 造 成 事 業

—緊急発掘調査概報—

末広六道原遺跡

1979

伊 那 市 教 育 委 員 会
長 野 県 企 業 局

序

近年、住宅建築の波が我が伊那市でも急激化し、その前段階としての土地造成が各所で行われ、赤々した山崩が露出しています。この動きにともなって貴重な埋蔵文化財が破壊されていく現状であります。

この度、市内美篶地区で県企業局による団地構想が具体化の運びとなり、当地には末広六道原遺跡が該当しそうということで、昨年3月分布調査を行い、それにもとづいて、本調査を昭和53年夏期に実施いたしました。

発掘調査の結果は、伊那市内でもまれな縄文晩期の造構、縄文晩期の遺物が多数発見され、学問的に、今まで空白部分であった同時期が明らかにされることになりました。

概報の刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた長野県企業局、深いご指導をいただいた長野県教育委員会、この発掘調査に精励された友野団長を始めとする調査団の各位、この調査のためにご協力いただいた地元区長の各位、直接的に協力いただいた作業員各位に対し、深甚な謝意を表する次第であります。

昭和54年3月10日

伊那市教育委員会

教育長 伊沢一雄

凡 例

1. 今回の発掘調査は宅地造成事業で、緊急分布調査に基づいて、本調査を実施した概報とする。
2. この調査は、宅地造成事業に伴なう緊急発掘調査で、事業は長野県企業局の委託により実施した。
3. 本調査は、昭和53年度中に業務を終了する義務があるため、概報は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆすることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美 田畠辰雄

◎図版作製者

○遺構および地形

友野良一 飯塚政美 田畠辰雄

◎写真撮影

○発掘・遺構および遺物

友野良一 飯塚政美 田畠辰雄

5. 本概報の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目 次

序
凡 例
目 次
挿図目次
表 目 次
図版目次

第Ⅰ章 環 境.....	(1~3)
第1節 位 置.....	(1)
第2節 地形・地質.....	(1)
第3節 歴史的環境.....	(2~3)
第Ⅱ章 発掘調査の経過.....	(4~8)
第1節 発掘調査の経緯.....	(4)
第2節 調査の組織.....	(4)
第3節 発掘日誌.....	(5~8)
第Ⅲ章 造 構.....	(9~19)
第1節 土 坂.....	(11~18)
第2節 竪 穴.....	(18~19)
第Ⅳ章 造 物.....	(20~22)
第1節 土 器.....	(20~21)
第2節 石 器.....	(22)
第Ⅴ章 ま と め.....	(23)

目 次

挿 図 目 次

第 1 図	位置及び遺跡分布図	(3)
第 2 図	地形及び遺構配置図	(9)
第 3 図	第 1 号土塁実測図	(11)
第 4 図	第 2 号土塁実測図	(11)
第 5 図	第 3 号土塁実測図	(12)
第 6 図	第 4 号土塁実測図	(12)
第 7 図	第 5 号土塁実測図	(13)
第 8 図	第 6 号土塁実測図	(14)
第 9 図	第 7 号土塁実測図	(14)
第10図	第 8 号土塁実測図	(15)
第11図	第 9 号土塁実測図	(15)
第12図	第 10 号土塁実測図	(16)
第13図	第 11 号土塁実測図	(16)
第14図	第 12 号土塁実測図	(16)
第15図	第 13 号土塁実測図	(17)
第16図	第 14 号土塁実測図	(17)
第17図	第 15 号土塁実測図	(17)
第18図	第 16 号土塁実測図	(18)
第19図	第 17 号土塁実測図	(18)
第20図	第 1 号竪穴実測図	(19)

表 目 次

第 1 表	出土土器の形状一覧表	(20)
第 2 表	出土土器の形状一覧表	(20)
第 3 表	出土土器の形状一覧表	(21)
第 4 表	出土土器の形状一覧表	(21)
第 5 表	出土土器の形状一覧表	(22)
第 6 表	出土石器の形状一覧表	(22)

目 大

圖 版 目 次

- 圖版 1 遺跡全景
- 圖版 2 遺跡近景
- 圖版 3 遺 構
- 圖版 4 遺 構
- 圖版 5 遺 構
- 圖版 6 遺 構
- 圖版 7 遺 構
- 圖版 8 遺 構
- 圖版 9 遺 構
- 圖版 10 遺 構
- 圖版 11 遺 構
- 圖版 12 遺物出土狀況
- 圖版 13 遺物出土狀況
- 圖版 14 出土土器
- 圖版 15 出土土器
- 圖版 16 出土土器
- 圖版 17 出土土器
- 圖版 18 出土土器
- 圖版 19 出土石器

第Ⅰ章 環 境

第1節 位 置

末広六道原遺跡は、長野県伊那市大字美篶下川手、末広両部落にわたって所在しています。遺跡地までの道順としては、二通り考えられる。天竜川に沿って南北に走る竜東線を箕輪町へ向って北上して上牧部落のすこし手前で信号機のある四角にぶつかる。この四角を右折し、段丘を登りつめると、市営住宅や県営住宅がマッチ箱のような姿で並んでいるこの住宅地帯より東へ200m程行った道路の南側の森林地帯が遺跡地である。もう一方の道順は伊那市街より高速線を東へ約1km程行き、適当に段丘崖につくられた道路を北側へ登りつめると、三峰川第一段丘面が広がっている。この段丘面は南北に500m程を規模をもっている。この段丘面をさらに北側へ行くと、第二段丘にぶつかる。この段丘面を登り切ると、広々とした第二段丘面が展開している。この段丘面でまず最初に目につくのは、伊那市営のゴミ焼却場の空高くそそり立つ白い煙突、この目標のすぐ北側の森林地帯が遺跡地となっている。前述した森林地帯の中央部を東西に走っている道路は農業振興に役立つものとして、数年前に開通し、農免道路と呼ばれている。

第2節 地 形・地 質

伊那谷は南北に走る二つの大きな山脈（西側は木曾山脈、東側は赤石山脈）にはさまれ、縱谷状地形の最低部に天竜川が北から南へ流れ、太平洋へと注いでいる。この両岸にはそれぞれ6段の段丘が発達している。遺跡地の段丘面は六道原段丘と呼ばれ、その内容について、上伊那郡誌「自然篇」によれば、「現河床から20m～30mの高さをもつ、六道原疊層の堆積面で、小坂田ロームと波田ロームとが風成でのって来るが、小坂田ロームと波田ロームに覆われている堆積段丘である。」「波田ローム層の産状は、最上位のローム層で、周辺山麓より低い最も広大な層状地面（高位堆積面）の上有る。この場合大泉面（竜西段丘面）でも、卯ノ木面（竜東段丘面）においても、このローム層の直下の疊層とは整合である。また、交通段丘面の南殿段丘の本ローム層の下部と直下の疊層も整合である。」

「小坂田ローム層の産状は、大泉面、卯ノ木面上でわずかに重なっているが、一般に低地部では水成相を示し、高位では風成で、ときには下部のみ、多少、水の影響を受けている。手良面や荒神山面六道原面上では全部が風成である。下部の第1浮石帶は、下位の西林ロームの風化帶の上にきれいな境をもって重なっている。」以上、述べてきた諸条件のもとに、遺跡地は存在している。

遺跡地の微地形は南側に美篶笠原より源をもつ土王田川の末流が流れ込んでいる。現在は水田化が進んでしまって河岸段丘の面影をわずかに留めるに過ぎない。

第3節 歴史的環境

末広六道原遺跡の周辺に分布している遺跡名を記載し、その遺跡の時代的内容について述べてみたいと思う。牧ヶ原遺跡は縄文中期弥生後期、大清水遺跡は縄文中期、清水洞遺跡は縄文中期、宮の前遺跡は縄文前期、縄文中期、御園南部遺跡は縄文中期、土師器、須恵器、灰釉陶器、御園東部遺跡は縄文中期、石塚遺跡は縄文中期、今泉遺跡は縄文早、前中、後期、土師器、須恵器、灰釉陶器、原垣外遺跡は縄文前期、土師器、須恵器、灰釉陶器、鳥居原遺跡は縄文中期、土師器、須恵器、灰釉陶器、高尾遺跡は縄文前期、縄文中期、大久保遺跡は須恵器、野底古墳群は18号まである。上牧古墳群は4号墳まである。長者屋敷遺跡は縄文中期、弥生中期、弥生後期、土師器、須恵器、灰釉陶器、芝垣外遺跡は弥生後期、土師器、須恵器、上の原遺跡は縄文中期、弥生後期、大原遺跡は縄文中期、大宮原遺跡は縄文中期、伊那東部中遺跡は土師器、須恵器、古町古墳群は5号墳まである。上垣外遺跡は土師器、須恵器、灰釉陶器、爪ヶ崎遺跡は弥生後期、土師器である。

発掘地区の南側に木立がぱくっと集中している個所がみられる。これが六道地蔵尊である。これについては由来を伊那市寺院誌によれば次のように記してある。「わが国における六道地蔵の發祥は古く文徳天皇の仁寿2年(852)小野笠が京都伏見の大善寺に六地蔵を安置したのがはじまり」と言われ、後、後白河天皇の保元2年(1157)平清盛がこれを諸国に分置したが、その時1体をこの信濃国笠原庄に堂宇を建てて安置したとも伝えられている。また一説には笠原の牧の牧監笠原平吾頼直の墓とも言われる。縁日が旧暦の7月6日、7日と定められたのは、笠が京都5条にある玲瓏寺に詣で、冥途へ行って帰って来たというその日に因んだものであろう。

現在は8月6日で、この日は近在から亡くなった人々の供養のために、善男善女がつめかけ、殊に新盆の家では必ずここに詣でて松のぼい(秀枝の意か)をもらい、これに仏を乗り移らせて帰り、仏壇に供えて盂蘭盆を待つ習慣になっている。」

六道地蔵尊に現存する仏像について触れてみると次のようになる。本尊としては、地蔵菩薩立像(厨子入)、仏身高41.2cm、台座高12.8cm、光背、円頭光、その他の仏像としては地蔵菩薩立像、仏身高91.5cm、台座高25.5cm光背、頭光、弘法大師像、台座銘「文政二卯七月両川手名主次郎左エ門清兵衛伊那四国四捨八番六道地蔵尊施主当村中、願主伊那大島宿彦右エ門八十三才」。

石像 賽の河原の地蔵尊十数体

遺跡地の近くでは戦時に飛行場をつくった所があり、松林のなかには飛行機の格納庫として利用された跡が生々しく残っていた。

(飯塚 政美)



第1図 位置及び遺跡分布図

遺 跡 の 名 称

- | | | | |
|--------|--------|-------|--------|
| ①牧ヶ原 | ②大清水 | ③清水洞 | ④宮の前 |
| ⑤御園南部 | ⑥御園東部 | ⑦石塚 | ⑧今泉 |
| ⑨原垣外 | ⑩鳥居原 | ⑪高尾 | ⑫大久保 |
| ⑬野底古墳群 | ⑭上牧古墳群 | ⑮長者屋敷 | ⑯芝垣外 |
| ⑰上の原 | ⑱大原 | ⑲大宮原 | ⑳伊那東部中 |
| ㉑古町古墳群 | ㉒上垣外 | ㉓爪ヶ崎 | ㉔末広六道原 |

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

県企業局による美篠地区宅地造成事業は数年前より計画され、当時、県文化課権口指導主事と市教育委員会とで現地協議を行ない分布調査をして、遺跡の状態を確認したうえで改めて本格的な発掘調査をするという計画をたてた。昨年の3月に用地買収も、ほぼ終了したので、企業局と伊那市教育委員会とで打ち合せを行ない、分布調査を実施してみると予想していた以上の成果があったので、本格的な調査が是非とも必要と考え、本調査を昭和53年夏頃と決め、その準備にとりかかった。その準備として、伊那市教育委員会を中心にして、末広六道原遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。伊那市長と長野県企業局公営管理者との間に、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結する。

第2節 調査の組織

末広六道原遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢總一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映土	伊那市教育委員会委員長
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育前課長
"	石倉 俊彦	課長
"	有賀 武	課長補佐
"	米山 博章	係長
"	三沢真知子	主事

発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会員
"	御子柴泰正	"
調査員	飯塚 政美	"
"	田畑 長雄	"
"	福沢 幸一	"
調査補助員	原 修一	
"	池上 大二	
"	平沢 公夫	

第3節 発掘日誌

昭和53年7月22日 本日より発掘調査をするために、伊那市教育委員会の倉庫より発掘器材を運搬する。器材運搬後テントを2張り建てる。土用中のために、横張りのシートをつけないでおく。

昭和53年7月24日 発掘する地区は唐松林だったので、伐材屋が入って切り倒していたが、主なところだけとて、小枝はそのままに放置してあったので、それのあととかづけをする。

昭和53年7月25日 昨日行なった作業を本日も続行する。毎日、晴天が続き、頭上に太陽様が登りつめると、土が熱せられて足の裏が厚くなってきた。

昭和53年7月26日 昨日、行なった作業を本日も続行する。本日も朝から、太陽が照りつけ、遺跡地が凹地状のために蒸し風呂に入っているようであった。夕方がきてもらいたいものである。

昭和53年7月27日 本日よりグリットを組んで、本格的な調査にとりかかった。面積が広く、また凹凸が割合に著しいのでI区、II区、III区、IV区に分ける。I区A1から順々に掘り始めていく。唐松の根が地中深く入っていたので、掘るのに難渋した。

昭和53年7月28日 昨日、同様にグリット掘りを実施し、I区A5ラインまで、わたって、実施する。北から南の傾斜のために南へいく程、ローム層面までは深くなっていた。

昭和53年7月29日 本日も、グリット掘りを、西へ西へと伸していく。夕方までにはI区A10ラインまで到達する。毎日、晴天が続くので、土が乾燥してしまってボカボカしていた。本日は遺物の出土は全くなかった。

昭和53年7月31日 グリット掘りをI区A20ラインまで掘り進めていく。この附近は南から北の傾斜と、東から西への傾斜の合致した場所であった。

昭和53年8月1日 本日もグリット掘りを実施し、I区25ラインまで掘りすめていくと、遺物の出土が少々あった。

昭和53年8月2日 グリット掘りをI区の28ラインまで掘り進めていくと、土器の出土がかなりみられた。さらに、ところどころに落ち込みがみられ、I区C28を第1号土塙、I区D27、I区D28を第2号土塙、I区D27、I区E27を第3号土塙と命名する。一日中かかっ



暑いなか汗をふきふき

てプラン確認を終了。

昭和53年8月5日 昨日にヒントを得て、北側のII区25~30ラインのグリット掘りを実施してみると、II区D26、II区C26に第4号土塙、そのすぐ東側に第5号土塙を発見する。グリット掘りを反対に20~25ライン附近を実施する。すると各所に落ち込みがみられ、これらを第6号土塙、第7号土塙、第8号土塙、第11号土塙、第12号土塙とする。I区の30~34ラインにグリット掘りをしてみると、落ち込みがみられ、第9号土塙、第10号土塙とする。

昭和53年8月7日 本日はさらにII区を東へと進め、15ラインから20ライン附近のグリット掘りを実施してみると。昨日、同様に落ち込みがみられ、第13号土塙とする。

昭和53年8月8日 II区の12から15ライン附近のグリット掘りを実施してみると、各所に落ち込みがみられ、第14号土塙、第15号土塙、第16号土塙、第17号土塙とする。

昭和53年8月9日 本日は土層の堆積状況を調査するために、当遺跡地の最も凹地の部分へグリットを入れてみると、I区M32附近に方形形状の落ち込みがみられ、これを第1号竪穴とする。

昭和53年8月10日 II区の35から40ラインのグリット掘りをしてみると、何も遺構の検出及び遺物の出土はなかった。

昭和53年8月11日 II区の41から44ラインのグリット掘りをしてみると、何も検出されなかった。

昭和53年8月12日 本日は最も西側のIII区IV区のグリット掘りを実施するが、遺物の出土は全くなかった。また、耕作が浅いために1日かかってIII区、IV区の2区を掘り尽してしまう。明日よりお盆のため4日間の休みをとる。遺構が乾燥しないようにシートをかけておく。

昭和53年8月17日 本日は第1号土塙、第2号土塙、第3号土塙の掘り下げ及びその完掘をする。シートをかけておいたが遺構内に筋が入ったので水をまく。第1号土塙から第3号土塙の断面図作成。

昭和53年8月18日 本日は第4号土塙、第5号土塙、第6号土塙の掘り下げ及びその完掘を終了する。第4号土塙から第6号土塙の断面図作成。

昭和53年8月19日 本日は第7号土塙、第8号土塙、第9号土塙の掘り下げ及びその完掘を終了する。第7号土塙から第9号土塙の断面図作成。

昭和53年8月21日 本日は第10号土塙、第11号土塙、第12号土塙の掘り下げ及びその完掘を終了する。第10号土塙から第12号土塙の断面図作成。

昭和53年8月22日 第13号土塙、第14号土塙、第15号土塙の掘り下げ及びその完掘を終了する。第13号土塙から第15号土塙の断面



拔操作業は大変だ

第II章 発掘調査の経過

図作製。

昭和 53 年 8 月 23 日 第 16 号土塁、第 17 号土塁、第 1 号竪穴の掘り下げ及びその完掘を終了する。第 16 号土塁、第 17 号土塁の断面図作製。

昭和 53 年 8 月 24 日 第 1 号土塁から第 6 号土塁の平面及びレベル測量をする。

昭和 53 年 8 月 25 日 第 7 号土塁から第 12 号土塁の平面及びレベル測量をする。

昭和 53 年 8 月 26 日 第 13 号土塁から第 17 号土塁、第 1 号竪穴の平面及びレベル測量をする。

昭和 53 年 8 月 28 日 全測図の作製および土層の断面をとる。

昭和 53 年 8 月 29 日 発掘器材の水洗い、及びその点検、さらに縄でもちやすいようにしばっておく。

昭和 53 年 8 月 30 日 テントのとりこわし、発掘器材の運搬をする。

昭和 53 年 8 月 31 日 最後のあとかたづけをする。

昭和 53 年 9 月 遺物の水洗い、注記を終了する。

昭和 54 年 1 月 遺構の図面整理、図版作製。

昭和 54 年 2 月 遺物の写真撮影、原稿執筆。

昭和 54 年 3 月 報告書の編集、報告書を印刷所へ送る。

報告書の校正、報告書の刊行。

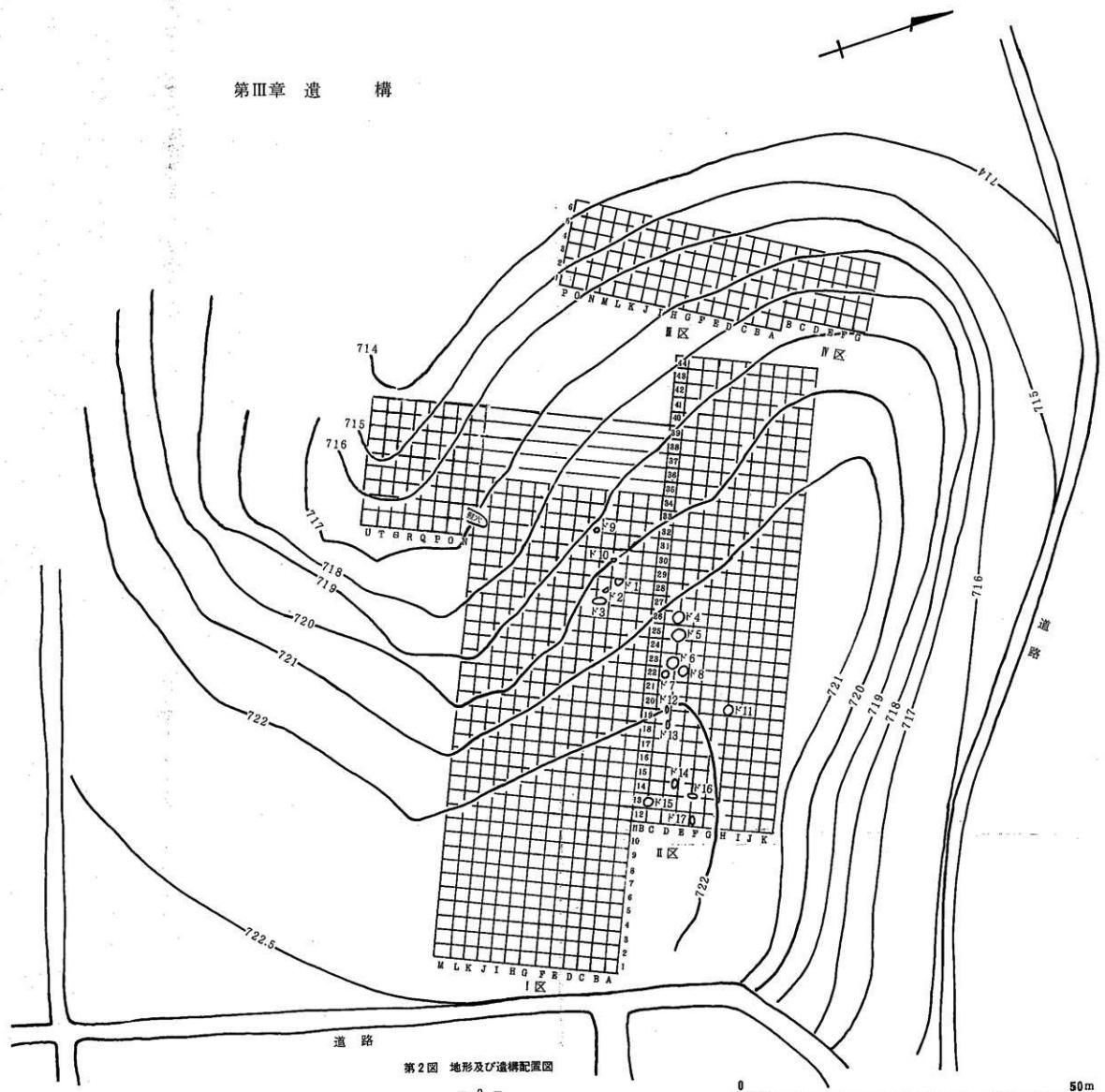
(飯塚 政美)

作業員名簿

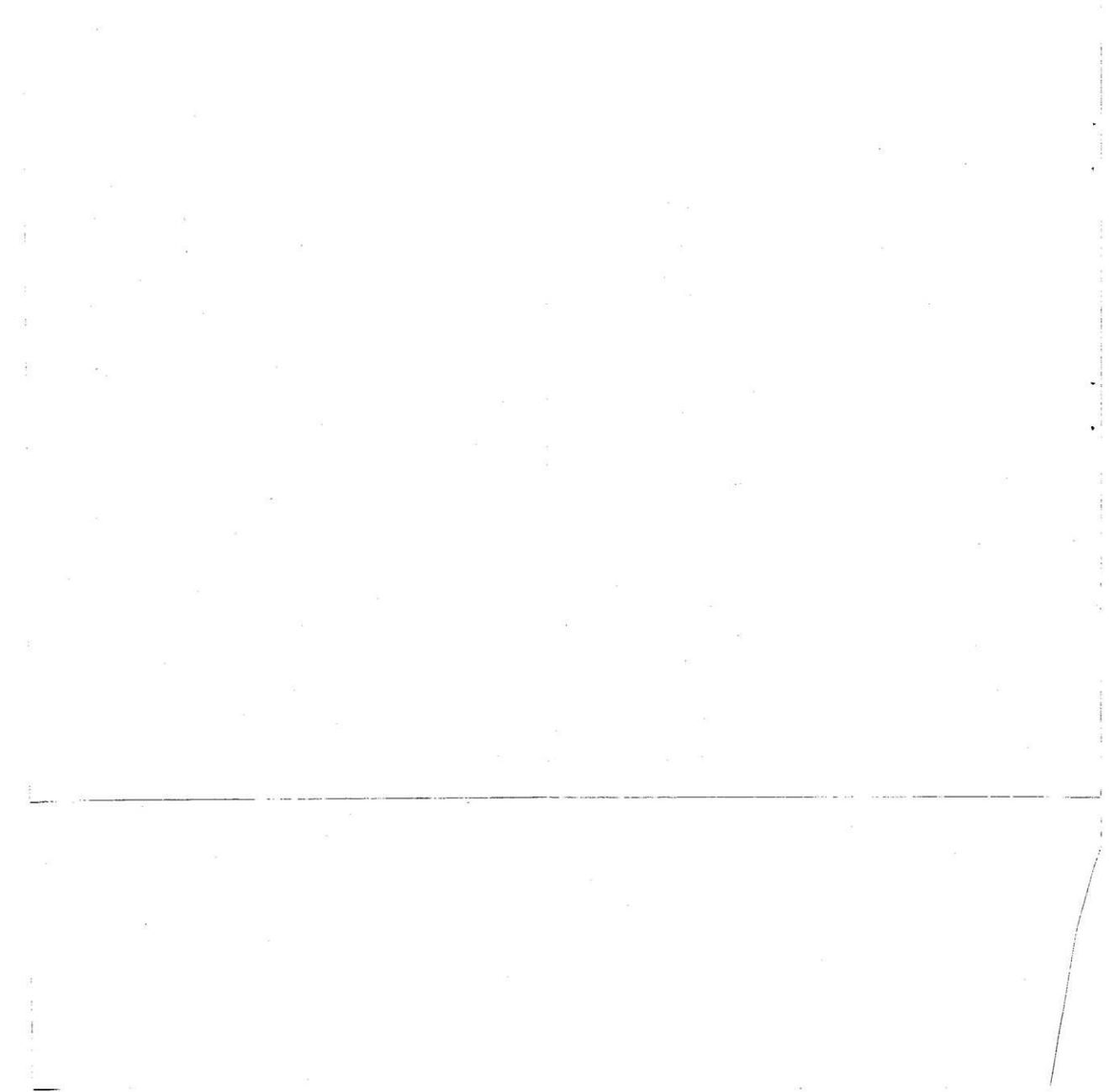
平沢公夫	池上大二	平沢平治	唐木淳
赤羽幸寿	唐木馨	酒井とし子	竹内美里
酒井富江	原修一	後藤重美	岩附稔
登内政光	笠井正彦	斧研聰明	飯塚真佐志
高島昇	小池正範	蟹沢英典	宮下坦司
橋爪ひとみ	伊藤計利		

(順不同)

第三章 遺構



第2図 地形及び遺構配置図



第1節 土 塚

第1号土塚（第3図、図版3）

I区 C 28に発見された土塚である。ローム層を掘り込み、南北1m 30cm、東西は西側が壁がないので不明である。壁高は15cm前後と浅く、状態は外傾していた。壁面はかなり凹凸がみられた。床面は大体水平で、わずかにかたくなっていた。プランは方形状を成している。

遺物は縄文晩期土器片が出土。

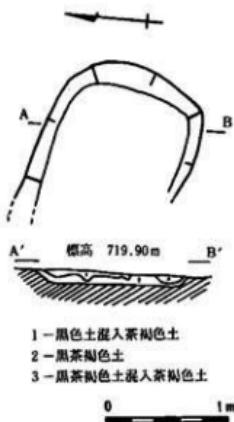
第2号土塚（第4図、図版3）

第1号土塚と第3号土塚とはさまれて発見された土塚である。ローム層を23cm程掘り込んで築かれており、その規模は、南北（推定73cm）、東西は1m 4cm程で、プランは長円形状を呈している。壁の状態は外弯が強く、壁面にはところどころにわずかに凹凸が認められた。床面はすりばち状に中央部が低くなっている、わずかにタタキになっていた。

遺物は何も出土しなかった。

第3号土塚（第5図、図版4）

本遺構は第2号土塚の東側に検出された土塚である。ローム層面を掘り込み構築され、その規模は南北1m 39cm、東西75cmで、北東の一隅は若干角張つてはいるが大体長円形プランを呈している。壁高は20~30cm前後可能である、状態は壁面にわずかに凹凸が認められ、外弯気味であった。床面はわずかにたたきになっていたり、少々凹凸が認められた。遺物は縄文晩期土器片出土。

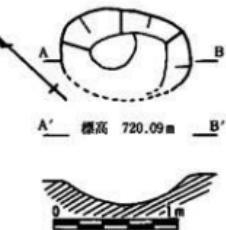


第3図 第1号土塚実測図

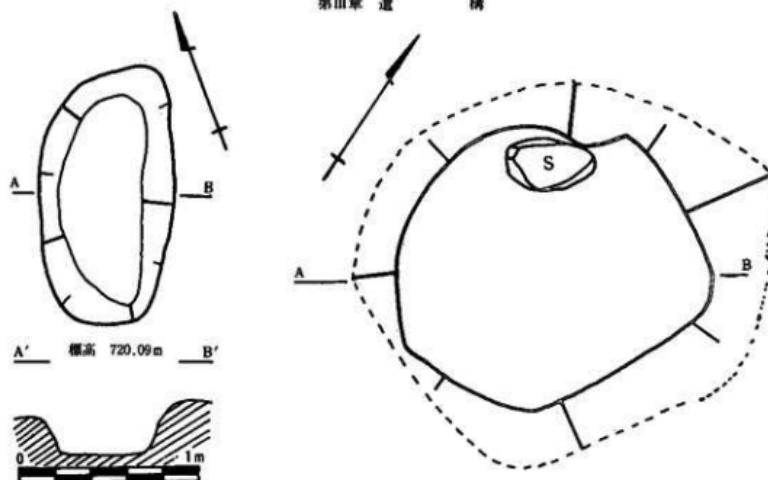
第4号土塚（第6図、図版4）

本遺構は第II区、東側で第5号土塚に近接して発見された土塚である。ソフトローム層面を掘り込み、上面で南北1m 30cm程、東西1m 50cm程、底面で南北1m 80cm程、東西2m程を測定でき、平面プランはところどころでは角張つてはいるが全般的には円形状を成している。

深さは1m 15cm前後を測り、割合に深かった。断面は東壁上部は大体垂直に、下部は極端なふくらみをもっている。壁面は凹凸が各所にみられた。底面はハードローム層中に構築され、わずかな凹凸があった。覆土中にはかなりの量の木炭が含まれていた。覆土の層序関係は混合しており、一時期に人為的に埋めた形跡がうかがえた。遺物は縄文晩期土器片出土。



第4図 第2号土塚実測図



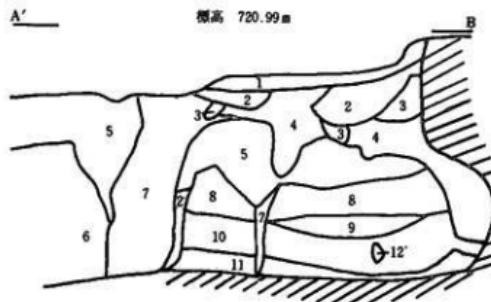
第5図 第3号土塙実測図

第5号土塙(第7図、図版5)

本遺構は第4号土塙と第6号土塙とはさまれた位置に検出された土塙である。平面プランは円形形状を呈しており、規模は南北1m67cm、東西1m64cm、深さは60cm前後を計る。ソフトローム層を基盤として掘り込んであり壁面は弯曲状を成し、凹凸が顕著であった。

床面はハードローム層中に構築され、凹凸が極めて著しかった。床面の中央部にピット状の落ち込みがあり、発見されたが、何を意味するかは不明である。

覆土中より多量の炭化物の検出をみた。また覆土の埋没状況は人為的に埋めた形跡が明瞭であった。遺物は縄文晩期土器片



- 1—明黒褐色土
- 2—黒色土
- 3—黒褐色土混入茶褐色土
- 4—茶褐色土混入明黒褐色土
- 5—ソフトローム層
- 6—ハードローム層
- 7—木の搅乱層
- 8—ローム層(ブロック状のものを多く含む)
- 9—黄褐色土(粒子粗い)
- 10—黒褐色土()
- 11—茶褐色土(粒子が密)
- 12—ソフトローム層のブロック状の混入

第6図 第4号土塙実測図

の出土。

第6号土塙（第8図、図版5）

本遺構は第7号土塙、第8号土塙に近接した位置に発見された土塙である。平面プランは円形を呈し、規模は上面で南北1m 47cm、東西1m 55cm、底部で南北1m 85cm、東西1m 90cm程を、深さは80cm前後を計る。ソフトローム層面を掘り込んで、構築してある。覆土は上面、下面ともに人為的に埋めたと思われる程、混合土層の類が多かった。また炭化物を含んだ層もみられた。

壁は上面では垂直に近く、下面に行くに従って断面袋状を呈する。壁面の凹凸は極めて複雑多岐であった。土層は壁上面はソフトローム層、下面是ハードローム層であった。

床面はハードローム層中に構築され大般水平となっていた。
遺物は縄文晩期土器片出土。

第7号土塙（第9図、図版6）

本遺構は北西に第6号土塙、第8号土塙、に近接して検出された。ソフトローム層面を掘り込んで構築してあり、平面プランは円形状を呈し、規模は南北85cm、東西87cm程、深さは20cm前後を計る。覆土は割合に混合土層が多かった。壁面は断面袋状を呈し、凹凸が多かった。床面はわずかにかたく、凹凸は顕著であった。

遺物は縄文晩期土器片出土。

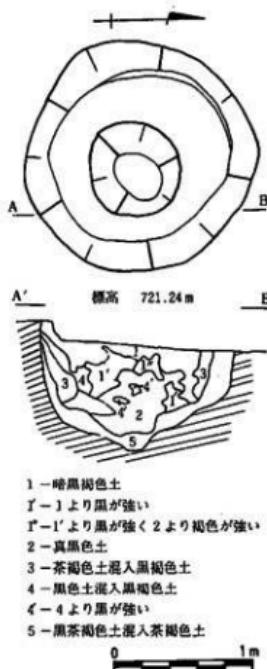
第8号土塙（第10図、図版6）

本遺構は南西で第6号土塙と近接し、ソフトローム層面を掘り込み、角張った形の円形を呈する土塙である。規模は南北1m 14cm、東西1m 23cm、深さは44cm程を計る。覆土中には木炭がわずかに含まれ、土層自体には混合土の色彩が強かった。

壁はすりばち状になっており、壁面自体には多くの凹凸が認められた。床面は凹凸があり、かたくたたかれていた。遺物は縄文晩期土器片出土。

第9号土塙（第11図、図版7）

本遺構は第1区の最も西側の位置に検出された土塙で、円形状を呈するプランで、規模は南北90cm、東西59cm程、深さ40~45cm位を計る。覆土は2色ないし3色の色の異なる混合土層より成り立っていた。また同土の中には少量の炭化物の検出が認められた。壁は若干弯曲状を成し、



第7図 第5号土塙実測図

壁面の凹凸は顕著であった。壁面の上部はソフトローム層、下部はハードローム層より形成されている。

床面はハードローム層に設けられ、弯曲状を成し、したがって中央部が最も低くなっている。遺構の掘り込み面は北から南への傾斜度が大きい。遺物は何も出土しなかった。

第10号土塙（第12図、図版7）

本遺構は第1区第9号土塙の東側の位置にあり、不整円形状の平面プランを呈し、規模は南北65cm、東西55cm、深さは最底部で65cm程度を測る。壁面は実に奇妙な凹凸を成し、崩落しそうな様相を呈していた。床面は一点に焦点が合うような姿を成していた。覆土中に少量の炭化物の検出をみた。遺物は何も出土しなかった。

第11号土塙（第13図、図版8）

本遺構は第II区の中央部附近、近くに何の遺構も見当らなかった。ソフトローム層面を掘り込んで構築してある。平面プランは円形状を呈している。規模は上面で、南北1m38cm程度、東西1m71cm程度、下面は南北1m70cm程度、東西1m76cm程度、深さ1m5cm程度を計る。覆土は混合土が多く、なかに焼土や木炭を含んだものもあった。壁は上面では外へひらき気味、下面是断面袋状、上部はソフトローム層、下面是ハードローム層であった。

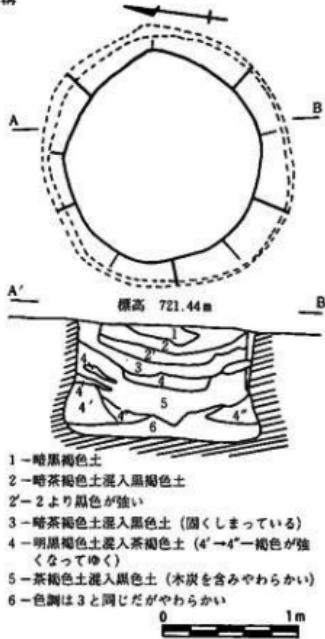
床面はハードローム層面につくられ、大般水平であった。

遺物は縄文晩期土器片出土。

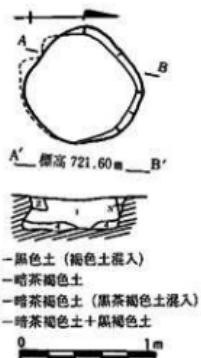
第12号土塙（第14図、図版8）

本遺構は西側で第7号土塙、東側で第13号土塙との二つにはざまれた位置に検出された。ソフトローム層面を掘り込んで構築してある。規模は南北35cm、東西70cm、深さ15cm程度を計る。覆土は黒褐色土。壁は外寄気味で、壁面の凹凸は多かった。床面は西側へ傾斜しており、軟弱気味であった。遺物は何も出土しなかった。

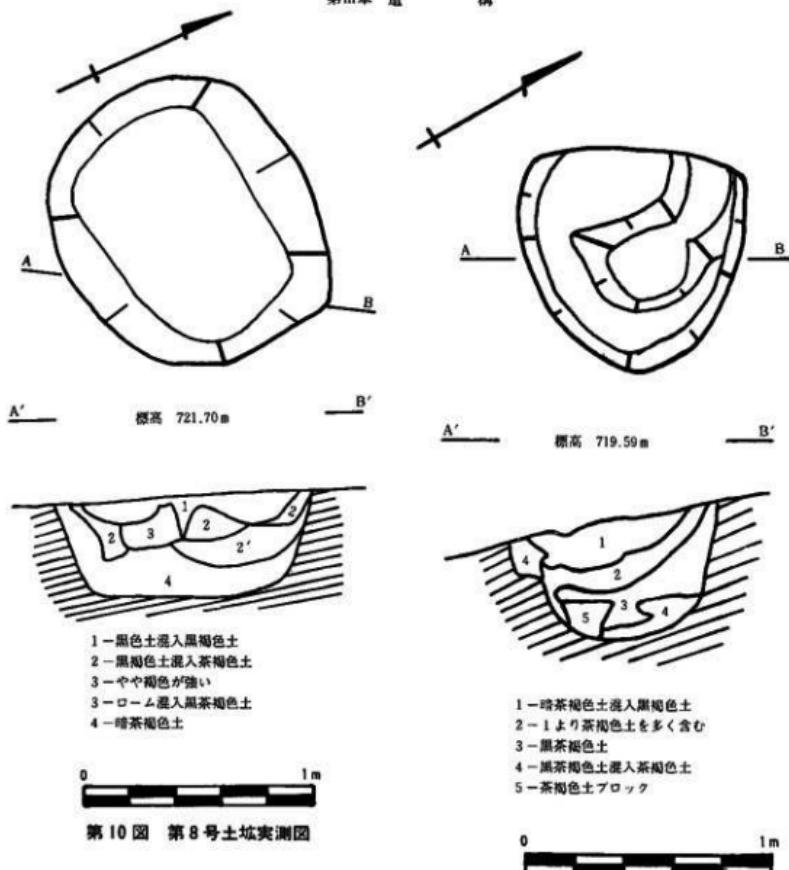
本遺構は他の土塙と比較してみると、土塙というよりもピット状という名称が妥当かと思われたが、一般的な名称からして土塙という名称をつけたが、他の土塙とは用途は異っていると思われる。



第8図 第6号土塙実測図



第9図 第7号土塙実測図



第10図 第8号土塙実測図

第11図 第9号土塙実測図

第13号土塙（第15図、図版9）

本遺構は西側に第6号土塙がすぐ近くにある位置に検出された土塙である。ソフトローム層

面を掘り込んで構築してある。平面プランは東西に長い長円形状を成し、規模は南北77cm程、東西1m18cm程、深さは20cm前後を計る。覆土は黒や茶の褐色土で占められていた。壁はすりばち状を成し、壁面は凹凸していた。

床面はかたく、割合に凹凸の占める部分が多かった。

遺物は何も出土しなかった。

第14号土塙(第16図、図版9)

本遺構の東側に第15号土塙、第16号土塙、第17号土塙の位置に検出された土塙である。平面プランは円形状をなし、その規模は上面で、南北1m3cm程、東西1m12cm程、下面は南北1m24cm、東西1m43cm程、深さは50cm前後を計る。覆土は黒色土及び茶褐色土で、埋没状態が人為的になっているように思われた。壁面は各所にわたって大小さまざまな凹凸がみられ、上部は外反気味、下部は断面袋状を成していた。

床面は中央部が若干高くなり、ハードローム層中に設けられていた。
遺物は縄文晚期土器片出土。

第15号土塙(第17図、図版10)

本遺構は近くに第16号土塙、第17号土塙の検出された位置に発見された土塙である。ソフトローム層を掘り込んで構築してあり、北側と南側が若干角張ってはいるが、全般的には円形状の平面プランを呈する。

規模は南北1m61cm程、東西1m45cm程、深さは93cm程を測る。壁面は多くの凹凸がみられた。壁上面はソフトローム層、下面是ハードローム層を成していた。床面は多くの凹凸がみられ、ハードローム層中につくられていた。
覆土は複雑な層序関係になっており、人為的な埋没の仕方をなしているものと思われる。

遺物は縄文晚期土器片出土。

第16号土塙(第18図、図版10)

本遺構は近くに第15号土塙、第17号土塙のある位置に検出された土塙である。ソフトローム層を掘り込んで構築してあり、その平面形プランはところどころで角張ってはいるが全般的には円形状を成している。覆土は黒色土、黒褐色土、黒褐色土混入茶褐色土の3層より形成されている。規模は南北1m程、東西1m4cm程、深さは20cm前後を計る。

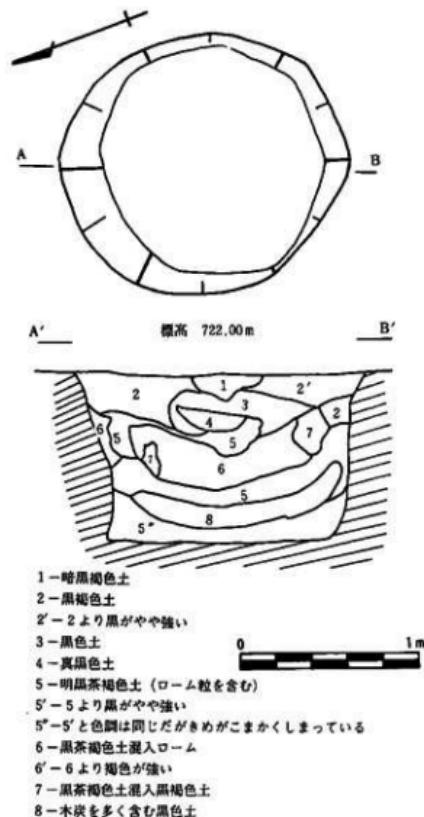
壁は外窓及び外傾気味を呈し、壁面は各所にわたって多くの凹凸がみられた。壁の上面及び下面

全般にわたってソフトローム層より成り立っていた。

床面はかたいタタキとなっており、多くの凹凸がみられた。遺物は、何も出土しなかった。

第17号土塙（第19図、図版11）

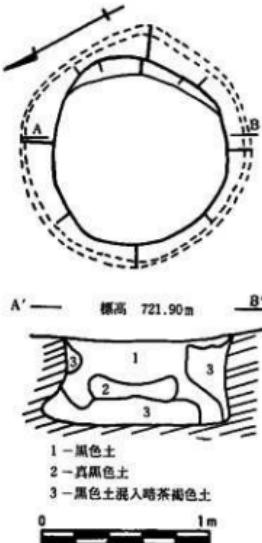
本遺構は今回発掘された土塙中最も東側の位置に検出された土塙である。ソフトローム層を掘り込んで構築してあり、平面形プランは北東の一角は角張ってはいるが、全般的には円形状を成している。規模は南北1m8cm程、東西は1m40



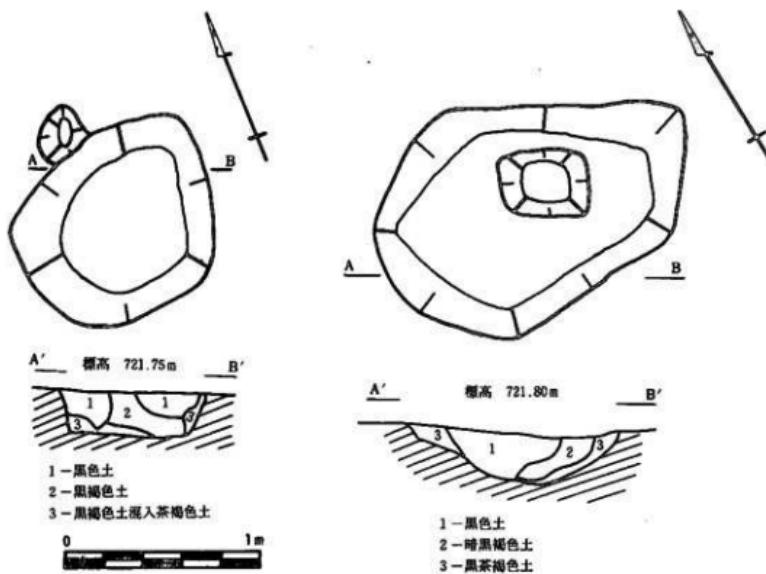
第17図 第15号土塙実測図



第15図 第13号土塙実測図



第16図 第14号土塙実測図



第18図 第16号土塙実測図

cm程、深さは20cm前後を計れる。壁面の凹凸は大きく、すりばち状を成している。床面はわずかに固く、デコボコがいたるところにみられる。遺物は何も出土しなかった。

第19図 第17号土塙実測図

(飯塚 政美)

第2節 穫 穴

第1号竪穴 (第20図、図版11)

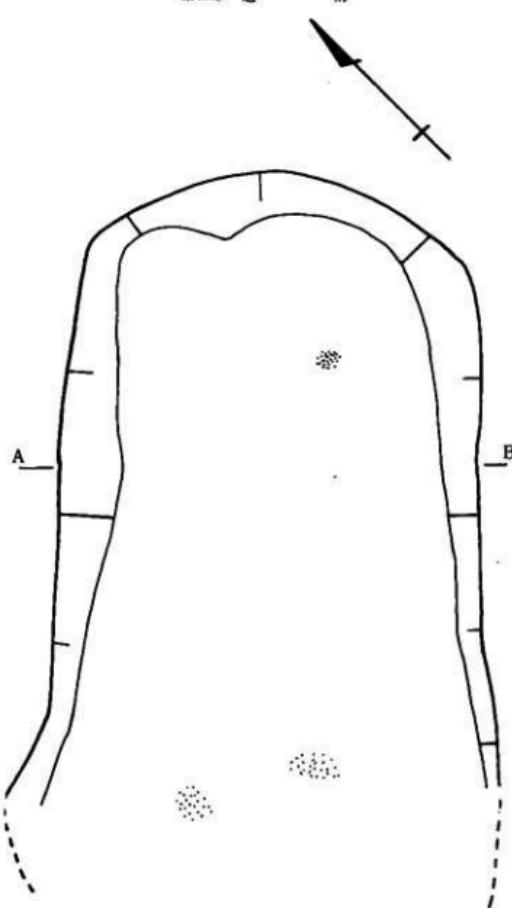
本造構は最も南側、最も低い部分に位置して検出された竪穴である。ソフトローム層面を掘り込んで構築され、傾斜面は北から南が著しい。規模は南北（南への傾斜が強いために南壁はない）は推定するに3m50cm前後、東西1m80cm、深さは20cm前後を測定できる。

覆土は黒褐色土層で充満し、そのなかに炭化物や焼土が相当量含まれていた。壁は北から南への傾斜のために、北は高くて、南は壁がほとんどない。壁は外へ大きく弯曲し、壁面自体には多くの炭化物がみられた。

床面はかたくたたかれており、多少の凹凸がみられた。また同面に密着あるいはわずかに浮いた面に多くの焼土が検出された。

遺物は何も出土しなかった。従って時代は不詳である。

(飯塚 政美)



第 20 図 第 1 号 竪穴実測図

第IV章 遺物

第1節 土器

土器の説明は表を作成し、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を附記しておくことにする。

胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかなる基準によったものではなく、筆者の主觀によるものである。
 (飯塚 政美)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
14	1	多量の長石	普通	赤褐色	6	条痕文	第1号土塙
"	2	少量の長石	良好	明褐色	7	"	第3号土塙
"	3	"	"	赤褐色	5	"	"
"	4	多量の長石	"	明黄褐色	6	刻目、条痕文	"
"	5	"	"	"	7	"	"
"	6	少量の雲母	"	茶褐色	5	"	第4号土塙
"	7	多量の雲母	"	黒褐色	6	"	"
"	8	多量の長石	"	"	7	"	"
"	9	多量の雲母	"	"	6	"	"
"	10	"	"	"	5	"	"
"	11	"	"	"	6	"	"

第1表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
15	1	多量の長石	良好	赤褐色	5	条痕文	第6号土塙
"	2	"	"	"	6	"	"
"	3	"	"	"	4	"	"
"	4	少量の長石	"	黒褐色	5	"	"
"	5	"	"	赤褐色	6	"	"
"	6	少量の長石	"	"	6	"	"
"	7	"	"	"	5	"	"
"	8	"	"	"	6	"	"
"	9	"	"	"	5	"	"
"	10	"	"	"	5	"	"
"	11	多量の長石	"	黄褐色	6	"	"
"	12	少量の長石	"	茶褐色	5	"	"
"	13	少量の雲母	"	黒褐色	4	"	"
"	14	多量の雲母	"	赤褐色	4	"	"
"	15	少量の雲母	"	黒褐色	6	隕文	"

第2表 出土土器の形状一覧表

第IV章 遺物

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
16	1	多量の長石	良 好	黄褐色	6	条痕文	第5号土塗
"	2	"	普 通	赤褐色	7	"	第6号土塗
"	3	"	"	"	5	"	"
"	4	少量の長石	"	茶褐色	6	"	"
"	5	"	"	"	5	"	"
"	6	"	"	黑褐色	6	"	"
"	7	"	"	"	7	"	"
"	8	"	良 好	"	7	"	"
"	9	少量の雲母	"	"	6	"	"
"	10	"	普 通	"	6	"	"
"	11	"	"	赤褐色	5	条痕文、刻目	"
"	12	少量の長石	"	白灰色	7	無 文	"
"	13	少量の雲母	良 好	黑褐色	5	繩 文	"

第3表 出出土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
16	1	多量の長石	良 好	明白褐色	8	条痕文	第7号土塗
"	2	少量の長石	普 通	黒褐色	6	"	"
"	3	"	"	赤褐色	6	"	"
"	4	多量の長石	"	明黄褐色	5	"	"
"	5	多量の雲母	良 好	赤褐色	6	"	"
"	6	"	"	明茶褐色	7	"	"
"	7	"	普 通	"	6	"	第8号土塗
"	8	少量の雲母	良 好	明白褐色	5	"	第11号土塗
"	9	"	普 通	茶褐色	7	"	"
"	10	"	不 良	黒褐色	9	磨消繩文	"
"	11	少量の雲母	"	赤褐色	6	条痕文	"
"	12	"	良 好	黒褐色	5	"	"
"	13	"	"	明褐色	6	"	"

第4表 出出土器の形状一覧表

第Ⅳ章 遺 物

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
18	1	少量の長石	良 好	黒褐色	8	条痕文	第11号土塚
"	2	"	"	明茶褐色	6	"	"
"	3	"	"	赤褐色	6	"	"
"	4	"	"	明白褐色	5	"	"
"	5	少量の雲母	"	黒褐色	7	繩 文	"
"	6	多量の雲母	"	明赤褐色	6	条痕文	"
"	7	多量の長石	"	黒褐色	7	"	"
"	8	多量の雲母	"	"	6	"	"
"	9	"	"	赤褐色	7	"	"
"	10	少量の長石	"	明白褐色	7	"	"
"	11	多量の雲母	"	黄褐色	8	繩 文	"
"	12	"	"	茶褐色	9	条痕文	"
"	13	多量の長石	"	黒褐色	7	沈 線	"
"	14	"	"	"	6	条痕文	第15号土塚
"	15	"	"	茶褐色	5	刺突文	第14号土塚

第5表 出土土器の形状一覧表

第2節 石 器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石質、備考である。

(飯塚 政美)

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
19	1	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	第4号土塚
"	2	打製石斧	短冊形	砂 岩	第11号土塚
"	3	"	椎 形	緑泥岩	第4号土塚
"	4	敲 石	砂 岩	第11号土塚	
"	5	剥片石器	横刃形	砂 岩	第8号土塚

第6表 出土石器の形状一覧表

第V章 まとめ

末広六道原遺跡は昨年の3月に実施した分布調査をもとに本調査を実施した。分布調査により遺物集中出土地区は3,000m²範囲内に及んでいた。この範囲内で実際に発掘調査を実施してみると土塙17基、竪穴1基の遺構が検出された。

遺物は大部分縄文晩期に所属するものであった。遺物の出土層位は褐色土が大部分であり、ときどき後世の搅乱土のなかにも若干発見された。本遺跡の層位は上から耕土、黒褐色土、茶褐色土、ローム層の順であった。

今回、検出された土塙の特徴を順々に述べていくと次のようになる。

プランは、円形状のもの12例、方形状のもの1例、長円形状のもの3例、不整円形状のもの1例である。

規模はその大きさ方をとって比較してみると1mから2mの範囲内に含まれるもの13例、1m以下のもの4例であった。

深さは20cm以下は2例、20cmから50cmの範囲内は8例、50cmから70cmの範囲内は3例、70cmから1mの範囲内2例、1mを越す深いもの2例であった。

土塙のなかで特に極だったものとしては第4号土塙、第5号土塙、第6号土塙、第9号土塙、第11号土塙、第14号土塙、第15号土塙は典型的な姿をなしていた。これらの土塙内の覆土は人為的な埋め方をしており、從って本遺構の用途は墓塚的な色彩が強いようと思われる。

土器の出土した土塙は10例あり、いずれも晩期条痕文土器がその主体を占めていた。

竪穴は1基検出され、遺物の出土は何もなかったので、その時代決定は明らかではないが、焼土や木炭の検出量の多いのは何を意味するかは不明である。

土器は東海系のいわゆる櫻王や五貫森に代表される条痕文土器が90%以上をしめ、そのなかに混じて縄文のついた土器、あるいは磨消縄文的な土器も含まれていた。

伊那市全体からすれば縄文晩期は考古学的にみて空白部分が多くただけにこの時期を研究するのに今後役立つと思う。

末広六道原遺跡のある通称「六道原」と呼ばれているところで、水便の点で遺跡地はおそらく存在しないので、ないかと考えられていたが、今回の発掘でその考えを改めなければならなくなつた。

遺構は土塙と考えた、そのために生活の舞台となったのは、もう少し西へ寄った天竜川段丘面の近くと思われる。近年問題視されてきた水稻耕作文化が当遺跡に存在したとすればその栽培地区は天竜川氾濫原の湿地帯附近と思われる。

長野県内で代表される晩期の遺跡としては小諸市の氷遺跡、山の内町の佐野遺跡、郡内では駒ヶ根市の荒神沢遺跡、大城林遺跡、飯島町のうどん坂遺跡、伊那市の城平遺跡があげられる。

最後に土用中、発掘調査に精勤された、友野団長、調査員一同、作業員一同、さらに発掘調査が順調に行われるよう便宜を計ってくれた長野県企業局職員一同に対し、感謝する次第であります。

(飯塙 政美)

図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を東側より眺む

図版 1 遺跡全景

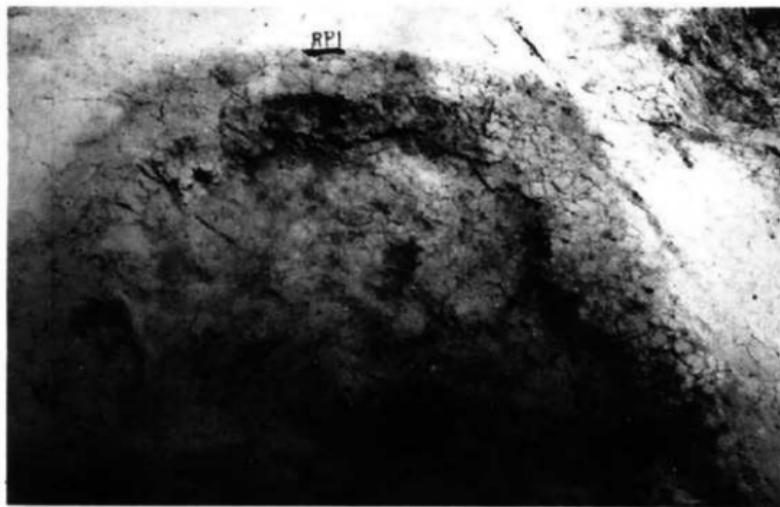


東側より遺跡発掘地区を眺む

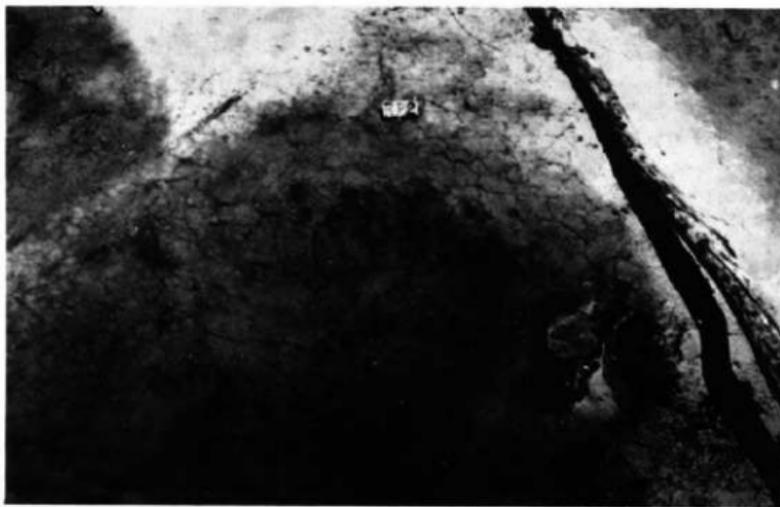


北側より遺跡発掘地区を眺む

図版2 遺跡近景



第 1 号 土 坡

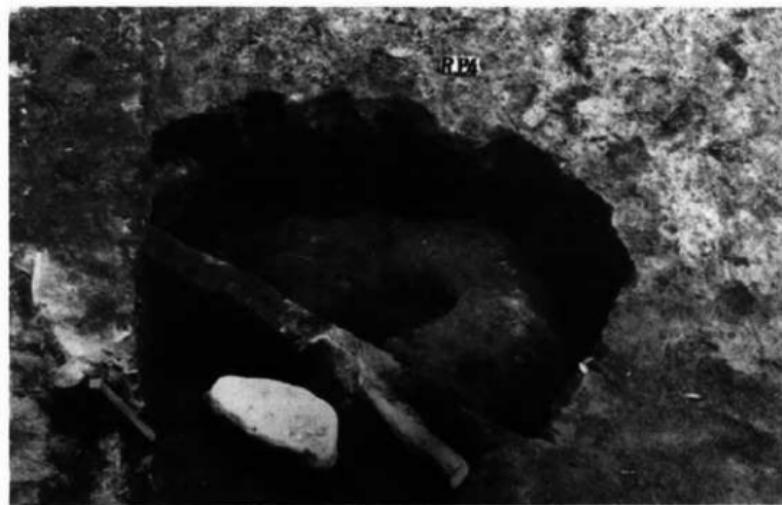


第 2 号 土 坡

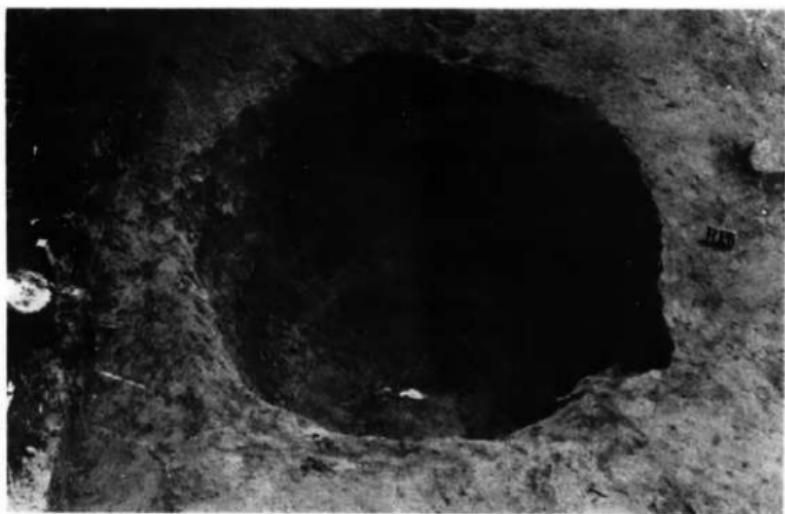
圖版 3 遺 構



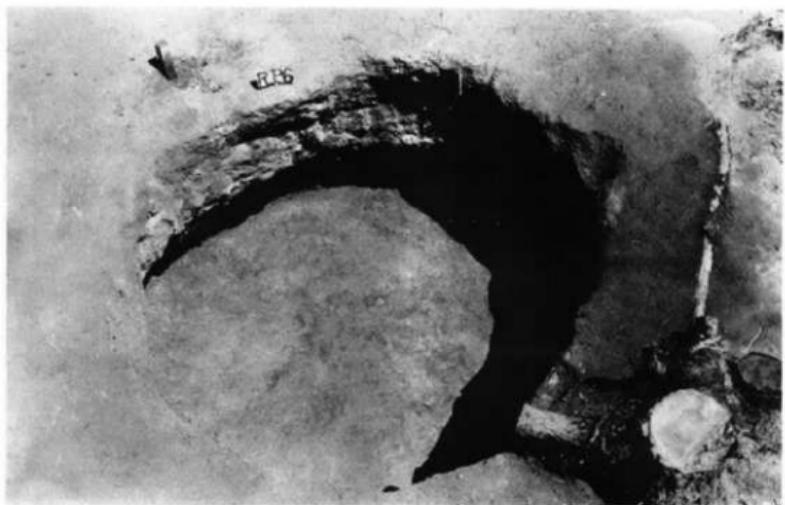
第3号土塙



第4号土塙
図版4 遺 槽



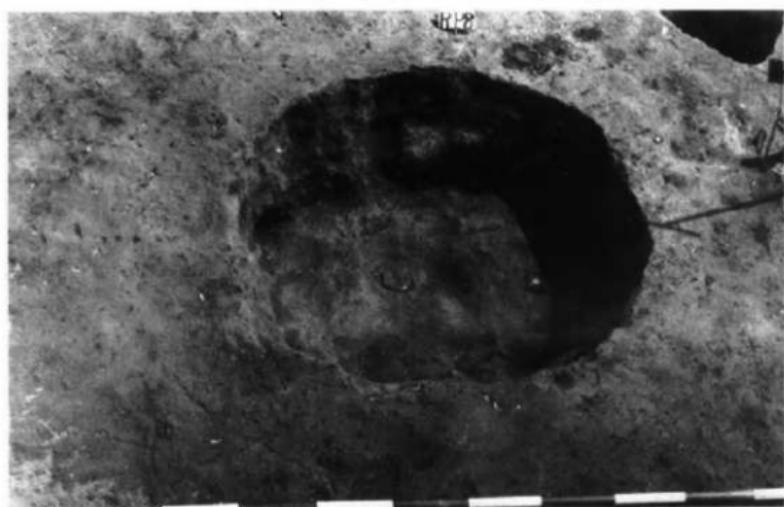
第 5 号 土 坡



第 6 号 土 坡
圖版 5 遺 構

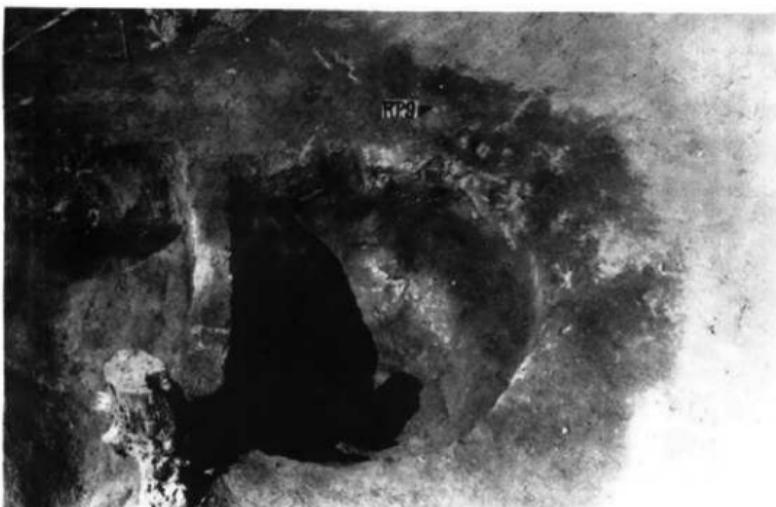


第 7 号 土 坡



第 8 号 土 坡

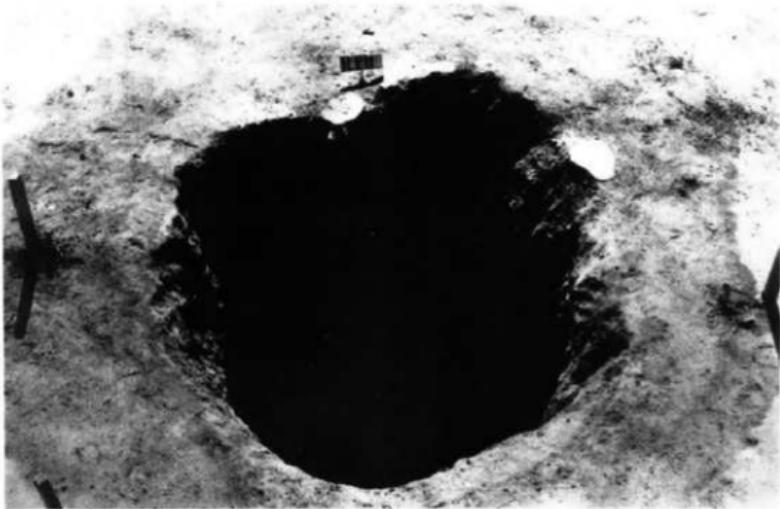
圖版 6 道 構



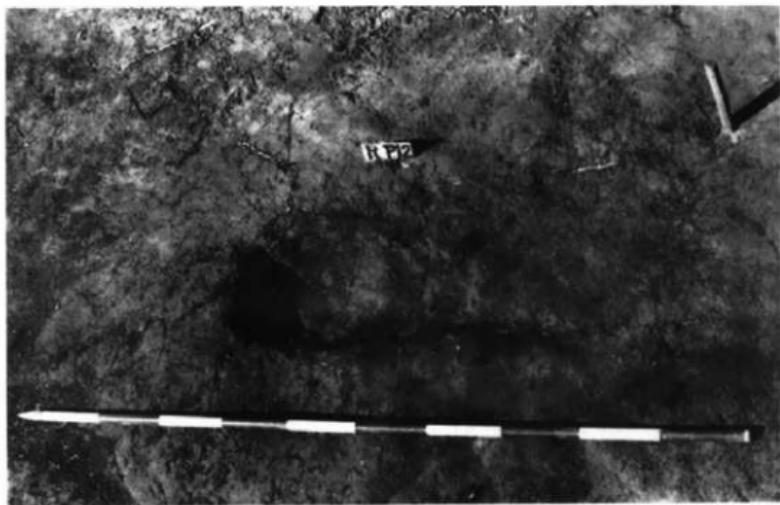
第 9 号 土 坡



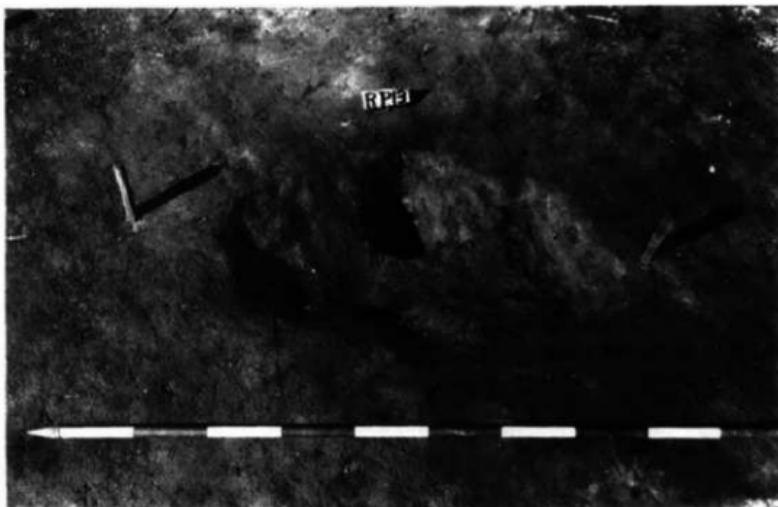
第 10 号 土 坡
図版 7 遺 構



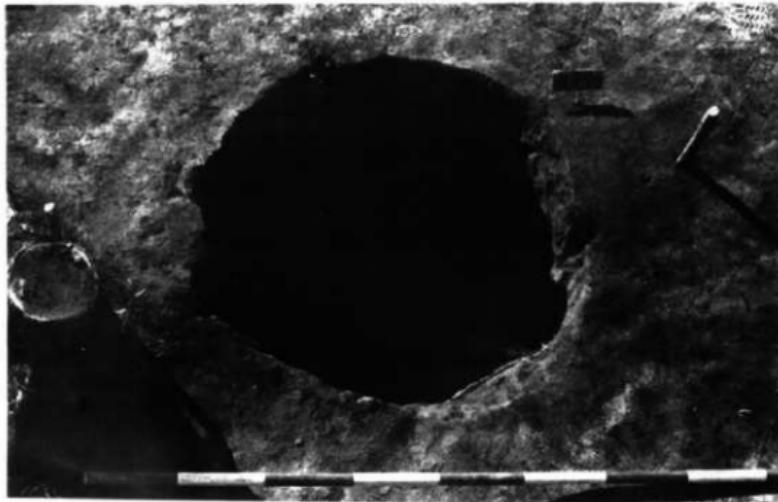
第 11 号 土 坡



第 12 号 土 坡
图版 8 遗 槽



第 13 号 土 坡

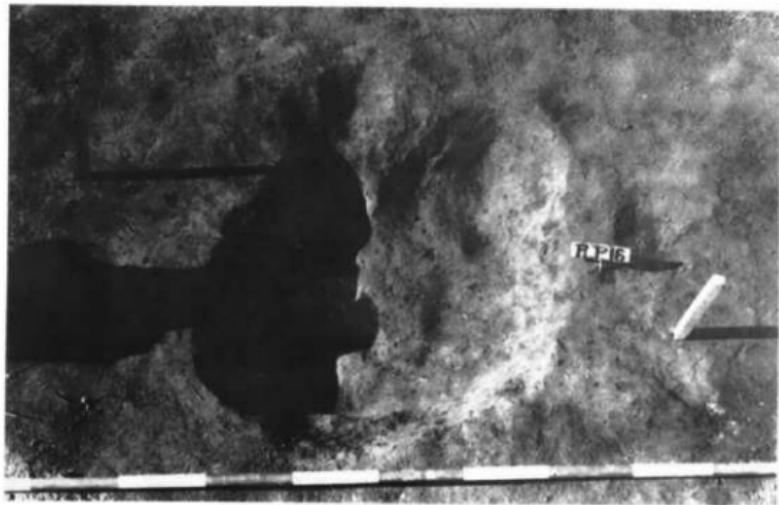


第 14 号 土 坡

圖版 9 造 構

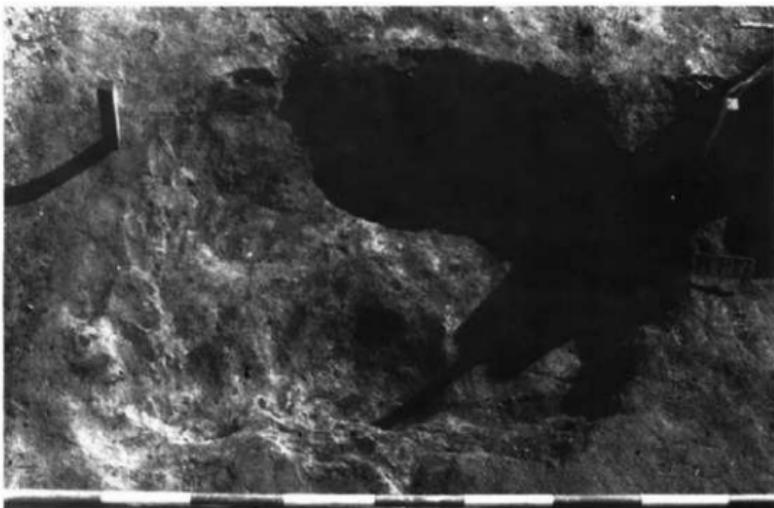


第 15 号 土 坑



第 16 号 土 坑

圖版10 遺 構



第 17 号 土 坑



第 1 号 竖 穴
圖版II 遺 構



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



石器出土状况



石器出土状况



石器出土状况



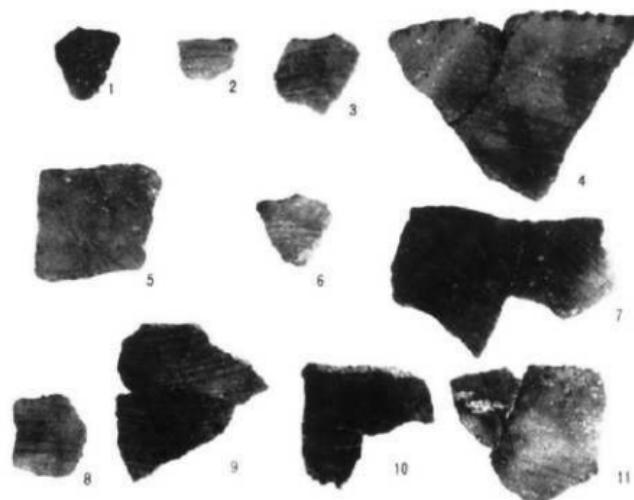
石器出土状况



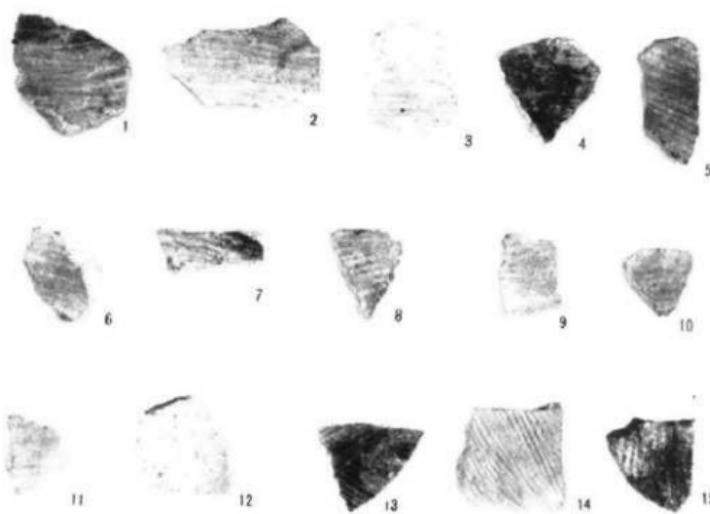
石器出土状况



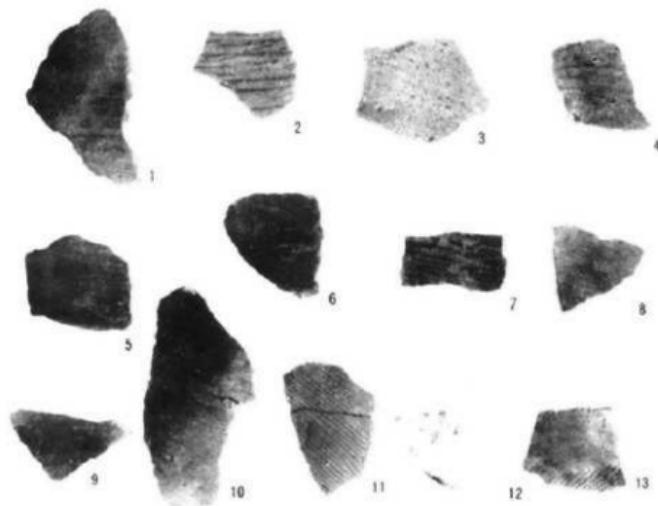
石器出土状况



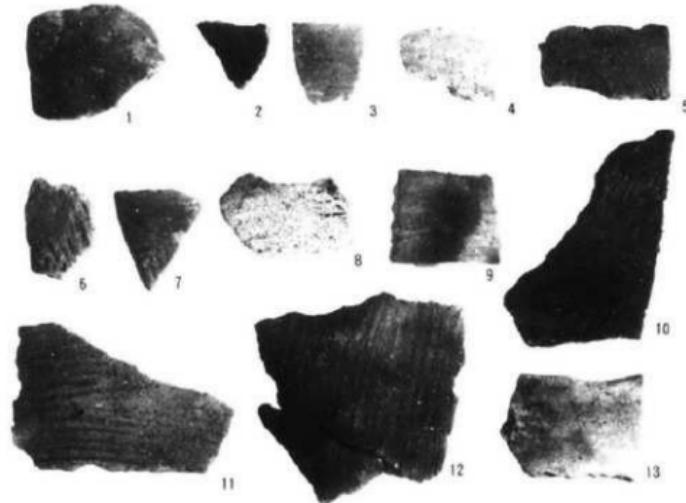
図版14 出土土器



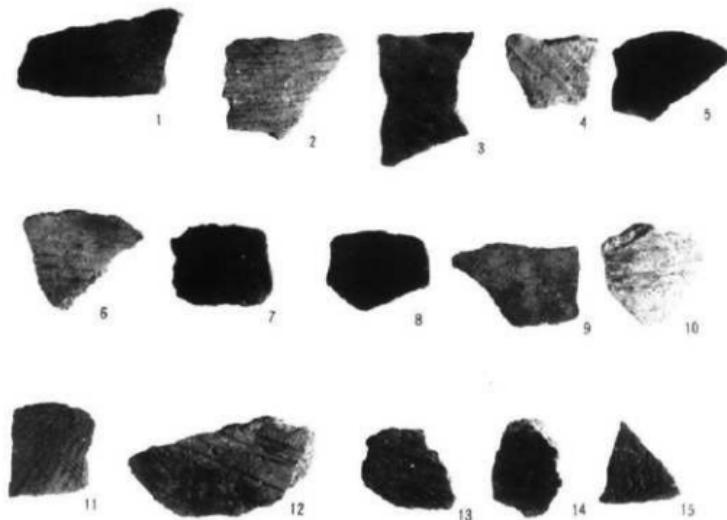
図版15 出土土器



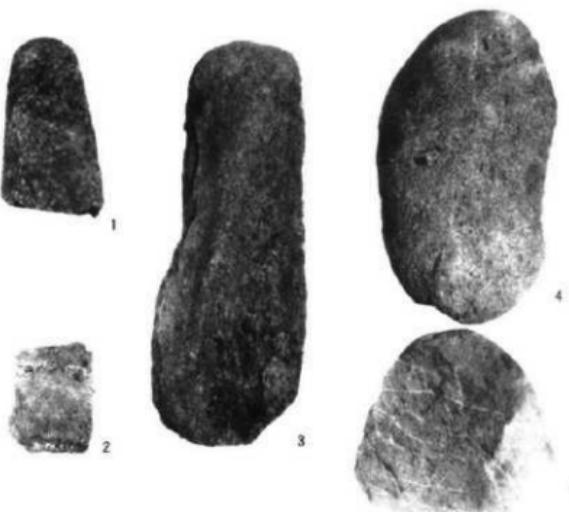
図版16 出土土器



図版17 出土土器



図版18 出土土器



図版19 出土石器

末広六道原遺跡
—緊急発掘調査概報—

昭和54年3月15日 印刷
昭和54年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 伊那市水神町
伊那北総合印刷株式会社

